



**Data**

監督、脚本、製作：ジョージ・クルーニー

脚本：コーエン兄弟

出演：マット・デイモン/ジュリアン・ムーア/オスカー・アイザック/ノア・ジュプ/ジエック・コンレイ/グレン・フレシュラー/カリマー・ウエストブルック/アレック・ス・ハッセル/トニー・エスピノサ/ゲイリー・バサラバ/リース・パーク

## 👁️👁️ みどころ

郊外の庭付き一戸建てを所有し、車で会社へ。家には、テレビ、冷蔵庫、洗濯機の「三種の神器」その他の電化製品がバッチリ！

古き良きアメリカでは1950年代にそんな理想的な街サバービコンが完成し、ロッジ夫妻はそこに住んでいたが、そこに一組の黒人の夫妻が転入してくると・・・？

コーエン兄弟の脚本、ジョージ・クルーニーの監督作品たる本作の「うたい文句」は「この2人、何かおかしい」だが、何かおかしいの？黒人差別の他、押し込み（狂言）強盗、保険金詐欺（？）、不倫殺人（？）等の事件が相次ぎ、ラストに向けては怒涛の殺人ミステリーへ！一体何人殺せばいいの？そんなごった煮作品の評価は？

ウィキペディアの評価は低いが、私はこんなごった煮が大好き！もっとも、ひょっとしてこれらはすべて子供が夢の中で見た幻想だったの・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ ドリームチームが結集！ところが、評判は？ ■□■

ジョージ・クルーニーは俳優としてはもちろん監督作品も多く、『グッドナイト&グッドラック』（05年）はアカデミー賞監督賞にもノミネートされている。また、イーサン・コーエンとジョエル・コーエンのコーエン兄弟は、『ファーゴ』（96年）で脚本賞を、『ノーカントリー』（07年）で監督賞と脚本賞を受賞。また『ブリッジ・オブ・スパイ』（15年）で脚本賞と監督賞にノミネートされる等、とりわけ、その脚本執筆能力が高く評価されている。

コーエン兄弟の監督作品にジョージ・クルーニーが出演した映画も多いが、本作はコーエン兄弟の脚本にジョージ・クルーニーが追加脚本したうえ、監督、製作をしたもの。そして、主演はマッド・デイモンとジュリアン・ムーアの2人だから、まさに本作は、ドリームチームが結集した作品だ。パンフレットによれば、2017年のベネチア国際映画祭のコンペ部門に出展された本作は、ギレルモ・デル・トロ監督の『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）と人気を分け合った話題作だと紹介されている。しかし、「サバービコン」とは一体ナニ？それだけではさっぱり分らないが、「仮面を被った街」という副題を見れば少しわかる。「サバービコン」とは1960年代のアメリカの古き良き年代の理想的な郊外住宅として開発された町の名前らしい。そう聞くと、都市問題をライフワークにし、近時は、人口減少社会における都市政策のあり方、とりわけコンパクトシティのあり方を大きなテーマとしている私には必見！

ところが、事前にウィキペディアを調べると、本作の評価は低く、サイト側による批評家の見解の要約は、「ジョージ・クルーニー監督にとって『サバービコン 仮面を被った街』は残念な失敗作となった。同作は社会風刺、人種差別への言及、殺人ミステリーという3つの要素をうまく捌こうとしたのだが、出来上がったのは3つのごった煮だった。」とされているから、アレレ……。とは言っても、自分の目でしっかり確認しなくちゃ……。

## ■□理想の住宅街に黒人家族が！こりゃ、どんな騒動に？■□

1967年4月に大阪大学に入学した私は、以降、田中角栄首相がリードする日本列島改造論と共に歩んできた。そんな1つの時代、大阪では千里ニュータウンと泉北ニュータウンの建設が一つの時代の象徴だった。そして、1985年以降、市街地再開発事業や土地区画整理事業をはじめとする都市問題に取り組んできた私は、筑波の田園都市構想に基づくニュータウン建設等の具体的な問題にも直面したが、本作冒頭に見る1950年代のサバービコンの町は、まさに当時のアメリカの理想のニュータウン。前面の広々とした道路と、背面で隣地に接して配置されている広い庭。これこそ、筑波で私たちが目指した緑住農の土地区画整理事業だ。

冒頭のナレーションによると、サバービコンの町には6万人の人たちが移住し、快適な生活を享受しているようだ。ところが、ある日そこに男の子を連れたい組の黒人夫婦であるマイヤーズ一家（カリマー・ウェストブルック、トニー・エスピノサ、リース・パーク）が移り住んできたことから、雰囲気は一変！1950年代の古く良きアメリカにおける、上流家庭の理想的な良妻賢母役をジュリアン・ムーアが演じた『エデンより彼方に』（02年）は、ヒロインと黒人男性との心の交流が大きな問題を生み、黒人差別問題を浮き彫りにしていく名作だった（『シネマ3』165頁）が、本作でも「そんなバカな！」と思える隣人たちの不安と不満が増大していく中、サバービコンの町は後半からクライマックスにかけて大変な騒動になっていく。

本作のサバビコンにおける黒人家族の例は、1957年夏にペンシルバニア州のレヴィットタウンで起きた黒人家族に対する嫌がらせの事件を参考にしてしているそうだが、本作はコーエン兄弟の脚本らしく、それをうまく誇大化して表現しているので、それに注目！日本では現在、いわゆる民泊新法の制定が進められているが、既に高級大規模マンションでは、管理規約で民泊禁止をうたうケースが増えるなど、民泊への不安が高まっている。したがって、その運用如何によっては、各地で本作と同じような事態を生む可能性がある。その意味でも、本作ではまずそんな問題点に注目！

## ■□■この2人、何かおかしい！■□■

マッド・デイモンは近時、『ボーン』シリーズにおけるアクション俳優としての地位が確立しているが、チラシに写る、髪をオールバックにし、メガネをかけたスーツ姿の男ロッジ・ガードナーは、いかにも実直なサラリーマン風。そして、その隣で、いかにも1950年代のクラシックなドレス姿で微笑んでいるのがジュリアン・ムーア扮するマーガレットだが、この2人は夫婦ではないところがミソ。さらに、チラシには「この2人、何かおかしい」の文字が躍っているから、なるほど本作はいかにもコーエン兄弟の脚本らしい。しかして、本作導入部ではサバビコンに、夢のマイホームを手に入れた、ロッジ家の主ガードナー（マッド・デイモン）と妻ローズ（ジュリアン・ムーア）が、一人息子のニッキー（ノア・ジュブ）、そして、足の不自由なローズのために今は住み込みで家事を手伝っているローズの姉のマーガレット（ジュリアン・ムーア 2役）たちの幸せそうな生活ぶりが映し出される。

ところがある日、ロッジ家に2人組の押し込み強盗スローン（グレイン・フレッシュラー）とルイス（アレックス・ハッセル）が入ったところから、この家族は急変していくことになる。スローンとルイスは押し込み強盗だから、現金や金目の物さえ持って行けばよく、家の人たちに危害を加えるつもりはないらしいが、全員クロロホルムを嗅がされたのは仕方ない。しかし、そこで間が悪いことに、ローズだけはその吸い込み方が急だったため死亡してしまったから大変。マーガレットの夫であるミッチ（ゲイリー・バサラバ）は一風変わった流儀でニッキーを励まし、ローズを殺した奴らに復讐してやると、犯人たちへの憎しみを募らせていたが、ガードナーが意外に怒っていないのは一体なぜ？彼は一人静かにその怒りを噛み殺しているだけなの・・・？それとも・・・？

本作では、そこらあたりの雰囲気最初から変なところが気がかりだが、そもそも交通事故で足が不自由になったローズのために、姉のマーガレットが夫のミッチを一人にして、住み込みでロッジ家の家事手伝いに来ているという設定自体どこかヘン。ちなみにガードナーとミッチは宗教観においても正反対らしいし、そのために黒人に対する見方も180度異なるのだが、そこらあたりは日本人の私たちには少し不可解。その意味でも、本作導入部の展開にはどこかヘンだなどと思う面が・・・。

そんな中、ある日、変な物音に引きずられるようにニッキーがある部屋をのぞいてみると、そこではガードナーとマーガレットが赤裸々に男女の愛を……。これにニッキーがショックを受けたのは当然だが、これを見ても、「この2人、何かおかしい」、どころではなく、完全にヘン！

## ■□押し込み強盗は狂言？■□

本作のパンフレットには、大場正明氏（映画評論家）の「ノワール・コメディと実話が暴く偽りの楽園」と題するコラムがある。しかし、そもそもノワールとコメディは正反対の言葉だから、「ノワール・コメディ」とは一体ナニ？それがジョージ・クルーニーとコーエン兄弟の合作による本作の脚本の面白さだから、まずは、それに注目！

一見中間管理職風のガードナーが、妻の葬儀休みを終えて、久しぶりにスーツ、ネクタイ姿で会社に入ると、彼は役員待遇並みの部屋に入り、秘書までついてきたから、ビックリ！次第に、これはどうも父親の七光りのおかげらしいことが分かってくるが、そこにかかってきた警察からの電話は、押し込み強盗の容疑者が捕まったので「面通し」に来てほしいとのこと。4人並んで立っている容疑者の姿を見ていると、いるいる！確かにあの大きな男が2人組の犯人の一人スローンだ。しかし、そこでのガードナーの答えは、「ここには犯人はいません。」だったから、アレレ……。子どもにはショックが大きすぎるからと入室を拒んでいたが、興味本位(?)で面通しの部屋に入ったニッキーにもこれが犯人だとハッキリわかっていたから、前述の父親の答えの意味がさっぱり分からなかったのは当然だ。まさか、ガードナーの記憶違い？いやいや、そんなバカなことはあり得ない。そう思っていると、ある日、ガードナーの執務室までスローンとルイスの2人が堂々と入ってきて、ガードナーにパンチを食らわせたうえで、あれこれのたまっている言葉を聞くと、何とあの押し込み強盗は狂言だったことが明らかに……。？

するとあの時、何が奪われたのは知らないが、それによる保険金請求も保険金詐欺なの？さらに、ひょっとして、ローズのクロロホルム吸入による死亡も事故ではなく、ガードナーとマーガレットが男女関係を進めるための囑託殺人？一気にそんな疑惑が広がっていったが、いやいや、これはひょっとしてニッキーの幻覚に過ぎないのかも……。

## ■□さらなる悪役も登場！保険金詐欺を暴くのは簡単？■□

本作ではガードナーのセリフが少ないが目立つが、確かにガードナーのように頭の悪い男はしゃべらないのが一番。しゃべらなければ、あまりボロが出ないからだ。しかし、面通しの場で、なぜ嘘をついたのかを、いかにニッキーに説明すればいいの？マーガレットとの「濡れ場」をニッキーに目撃されたのはマズイ。ガードナーが毎日そう悩みながら通勤していたのは明らかだが、ローズの死亡後、いかにもガードナーの妻のように自宅を守っているマーガレットの方も、ある日、保険調査員のバド・クーパー（オスカー・アイ

ザック)の訪問を受けたから大変。この手の調査員は厚かましさが取り柄(?)だから、いくらマーガレットが「私は何も知りません。」と言っても、強引に家の中に入り込み、何やかやと話を誘導していくのが得意技だ。私も弁護士として保険金詐欺まがいの事件を、保険会社側の依頼で何件も処理したが、本作に見るクーパーの調査員としての有能さにはビックリ！質問事項にカマをかけるのもテクニックのうちだが、ローズの死亡直前に保険金を増額していたとカマをかけて、マーガレットを誘導したのはさすがだ。さらに、あの手この手の質問によって、クーパーはこの事件は保険金詐欺だと確信するに至ったうえ、夕方には再度ガードナーに会いに来ると宣言したから、マーガレットは？そして、それを聞いたガードナーはどう対処するの？そんな興味を持って、保険金詐欺調査の第2ラウンドとなるガードナーとクーパーの対決に注目していると、クーパーが突然あっと驚く悪役に豹変したから、それにもビックリ！なるほど、これもコーエン兄弟の脚本の面白さだ。そして、そこでマーガレットから出されたコーヒーをクーパーが飲むと・・・？

ガードナーが言うように、保険金詐欺のためにローズを殺す計画を立てる男なら、保険金調査員を殺すためにコーヒーに毒を入れるくらいのものであるのでは？それを肯定しつつ、クーパーはなぜマーガレットが出してきたコーヒーを飲んだの？そして、苦しみ始めたクーパーを見ていると、マーガレットはコーヒーの中に一体何を入れたの？そこらあたりの展開は、まさにブラックコメディそのものだから、その後の展開も含めて、その面白さはあなた自身の目でしっかりと！

## ■□■怒濤の殺人ミステリーへ！一体何人殺せばいいの？■□■

本作は、「この2人、何かおかしい」がチラシのうたい文句だが、実は、ローズの兄で、マーガレットの夫でもあるミッチもかなりヘンな男だ。さらに、押し込み強盗に入ったスローンとルイスの2人組もかなりヘン。さらに、保険調査員のクーパーは、マーガレットと話す第1ラウンドでは優秀さを見せつけていたが、ガードナーと話しをする第2ラウンドでは、とんでもない悪人に豹変しているから、ビックリ。しかし、コーエン兄弟とジョージ・クルーニーが書いた本作のクライマックスに向かう脚本では、怒濤の殺人ミステリーになっていくので、それに注目！

警察の疑いの目が向けられた2人組の中で内部対立が生まれてきたのは仕方ないが、そうなると、必然的にガードナーとマーガレット、さらにニッキーの口封じの方向になっていったのも仕方ない。スローンとルイスにとって、ガードナーの家に押し入って、マーガレット、ガードナー、ニッキーを殺すのは簡単なこと。しかし、そんなことをすれば、その殺人の容疑は当然2人に向けられるのでは・・・？ここらあたりの配慮があまりなされていないのが、前述の通り、本作の評価が「社会風刺、人種差別への言及、殺人ミステリーという3つの要素をうまく捌こうとしたのだが、出来上がったのは3つのごった煮だった。」と言われている由縁だろう。そのため、本作のクライマックスに向けた、怒濤の殺人

ミステリーの展開には少し違和感がある。ミッチがニッキーを救いに来る展開には少し救いがあるが、ノワール・コメディとされる本作では、ラストに向けて一体何人殺せばいいの？

もっとも、本作で一貫してまともなのは、ほとんどセリフをしゃべらない（しゃべれない？）ニッキーだけ・・・？ニッキーがすべてを目撃しているのが本作の特徴だが、ひょっとして、その目撃したものがすべて幻想だったとすれば、なるほど、本作はノワール・コメディに・・・？

2018（平成30）年5月10日記